

福島 砂場シンポジウム

IN いいざか

～2.5×3mからの発信～

- 日時:2017年2月26日(日) 10:20～15:30
- 場所:福島市飯坂支所大会議室
- 主催:NPO 法人 福島 SAND-STORY
- 協賛:ヨークベニマル文化教育事業財団
- 後援:福島市、福島市教育委員会、
飯坂町商工会、飯坂町温泉観光協会、
福島民友新聞社、福島民報新聞社



「砂の遊びとアート」が、子どもの育ちと町をつくる

2016年10月、飯坂町乙和公園に設置された2.5×3mの砂場。今そこに多くの子どもたちや親子が遊びに来ています。東日本大震災から6年、ひとたび屋外での遊び環境を失いかけた福島は、どうその環境や機会を取り戻してきたか。
地域と行政、NPO 法人の連携による子育て・子育て環境の新たな創造の物語をご一緒に！

昨年、NPO 法人 福島 SAND-STORY は、地域の方々や自治会、行政の皆様との協働により、福島市飯坂町「乙和公園」への砂場設置事業に取り組みました。この活動は、次のような意義を持つものと考えます。

- ・ 地域住民が望んでいた公園遊具の充実
- ・ 地域、様々な団体や組織、行政とのコラボレーションの実現
- ・ 地域住民と東日本大震災からの避難住民の方々との交流促進
- ・ 地域に“愛される”砂場活用と管理のモデル的運用
- ・ 子どもたちの健全育成とふるさとに対する誇りの醸成
- ・ 老若男女すべての世代が生き生きと交流し循環する豊かな町づくりへの貢献

本シンポジウムは、以上の点に関する振り返りと今後の課題や可能性について考え、その意義を福島から県の内外に発信するものです。

■私たちと活動目的

NPO 法人福島 SAND-STORY は、2013 年 11 月 15 日、福島市にて開催された「福島インドア砂場サミット」において、福島県の復興促進を、砂場環境の取り戻しから始めることで一致した仲間たちによって出発し、昨年 4 月 22 日に NPO 法人格を取得した団体です。メンバーは、子育て・教育・福祉・生活・町づくりなどの経験をもとに、子どもたちの輝く未来づくりに「砂の遊びとアートの力」を通して取り組んでいます。

■主な活動

- ◎様々な「砂の遊びとアート」イベントを福島県内外で実施
- ◎イベントで使用した良質な砂の保育・教育・福祉施設、公園等への無償提供
- ◎保育者、教員、行政担当者、NPO メンバー等への研修会、ワークショップ
- ◎砂場の活用を柱とした「保幼小中接続」（保育・教育カリキュラムの充実）の活動
- ◎砂場に「本物の砂」を入れるための、砂の企業、遊具企業等間をつなぐサンドサロン事業

■チーム「福島 SAND-STORY」紹介

◎NPO 会員

- 笠間 浩幸（理事長・同志社女子大学現代社会学部現代こども学科教授）
- 児島 剛（副理事長 副代表）
- 河内ひろみ（副理事長 事務局長・福島市余目保育所主任保育士）
- 古関久美子（監査・福島市主任児童委員連絡会長）
- 篠崎 洋暢（株式会社ナムコ、企画開発本部人類遊び研究所主任研究員）
- 穂積 典子（生活協同組合コープふくしま 施設・法人アドバイザー）
- 宗形 潤子（福島大学総合教育研究センター准教授）
- 渡辺 英司（NPO 法人 キッズハウスりんごっこ理事長）
- 佐藤 耕平（NPO 法人いいざかサポーターズクラブ理事長）
- 上田 尚矢（T08 International 代表）
- 上田 幸恵（同志社大学嘱託職員）

◎アドバイザー：福島県内の子どもの発達と健康、運営に関する助言者

- 菊池 信太郎（菊池医院長、NPO 法人郡山ペップ子育てネットワーク理事長）
- 河原 啓二（姫路市生活審議監、こども環境研究会関西代表）
- 眞砂野 裕（東京・山梨動きづくり研究会）
- 武田千恵子（東京・山梨動きづくり研究会）
- 中山 豊（公益社団法人こども環境学会事務局長）

◎特別顧問：助言・援助サポーター

- 汐見 稔幸（白梅学園大学長、日本保育学会会長）
- 中村 和彦（山梨大学大学院教授）
- 半沢 通宏（名誉顧問・元日建工学株式会社北海道営業所）

本日のプログラム



同じ色のポストイットカードに、質問や感想、ご意見をお書き下さい。

- 10:20 ◇オープニング：コーラスサルビアの皆様による合唱
- 10:30 ◇代表挨拶：笠間浩幸（NPO 法人福島 SAND-STORY 理事長・同志社女子大学教授）
- 10:35 ◆第1部 飯坂砂場プロジェクトの振り返りとこれから 
コーディネーター：河内ひろみ（本 NPO 法人事務局長・福島市余目保育所主任保育士）
「乙和公園への砂場設置の背景と経緯」
・菅井高男 福島市飯坂支所長「飯坂町の概況と震災後の様子」
・阿蘇 力 福島市飯坂学習センター館長「飯坂町における市民の交流活動」
・紺野文康 福島市都市政策部 公園緑地課管理係長「乙和公園における砂場の新設」

「いいざかプラージュ 2016」
・中野明子（福島学院大学講師）「学生ボランティアの学び」
・穂積典子（コープふくしま 施設・法人アドバイザー）
「ホスピタリティ空間での母親への寄り添い」
・舟山千賀子（飯坂恵泉幼稚園長）「プレイメントでの世代間交流」
・二階堂信子（飯坂婦人会コーラスサルビアの会）
「みんなの砂場、可愛がっていきましょう！」
- 12:15 ◆ランチタイム・セッション：DVD「乳幼児期の砂遊び」、コメント：笠間浩幸 
- 13:10 ◆第2部 子どもの豊かな育ちを保障していくために 
司会：古関久美子（本 NPO 法人監事・福島市主任児童委員連絡会 会長）
- ### 基調講演
- 菊池信太郎 郡山市菊池医院 院長 医学博士 福島県小児科医会理事
「東日本大震災以降の福島における子どもの成長と発達の現状と課題」
- 14:40 ◆第3部 「砂の遊びとアート」が育む子ども、つながり、地域コミュニティ 
司会：児島剛（本 NPO 法人副代表）
・宗形潤子 福島大学准教授（本 NPO 法人・福島大学准教授）
「砂場活動を取り入れた幼保小中連接事業の試み」
・佐藤 満（いわき鳴き砂を守る会 会長）「いわきの鳴き砂を守る会の活動について」
・小堀 亨（いわき鳴き砂を守る会 事務局長）「いわきプラージュについて」
・篠崎洋暢（本 NPO 法人・株式会社ナムコ 企画開発本部人類遊び研究所主任研究員）
「福島の発信を受け止めた“すぎなみフェスタ”」
- 15:20 ◇まめと「シンポジウム宣言」：笠間浩幸
- 15:30 ◇閉会の挨拶：児島 剛

第1部プログラム関連アラカルト

■「飯坂婦人会コーラスサルビア」の皆さん

1999（平成 11）年、講師に佐藤道子先生をお迎えして結成されました。「明るく、楽しく、元気」、「心に太陽を、唇に歌を」をモットーとして練習に各種コンサート、敬老会や学習発表会、様々な地域の行事において美しい歌声を響かせ喜ばれています。2016 年の乙和公園への砂場設置に際しては、飯坂恵泉幼稚園の子どもたちとともに砂遊びを楽しまれ、子どもたちへの素敵な声かけをたくさんして下さいました。（参考：福島市飯坂学習センター発行「地区だより“いいざか” 平成 26 年 10 月 1 日「サークル紹介」）



砂場の設置を記念して開催したプレイベントでの、コーラスサルビアの皆さんと子どもたちの様子

■飯坂町と「乙和公園（おとわこうえん）」

福島市より北北西の人口約 2 万人を超す町です。ご承知の通り、松尾芭蕉、正岡子規、与謝野晶子らも訪れたという、古くから温泉で知られている町です。「日本三大けんか祭り」の一つとされる八幡神社例大祭である「飯坂けんか祭り」が、毎年 10 月に開催され大勢の若者が担ぐ6台の太鼓屋台が激しくぶつかる様子は見る者に興奮を与えます。他にも、「はなもも祭り」やおいしい果物の生産地となっています。東日本大震災以降は、浪江町、大熊町、双葉町から避難された方々の復興公営住宅も建っています。

「乙和公園」はその住宅のすぐ横にある公園で、普段から大勢の子どもたちや親子が訪れる公園です。ただ、残念なことにそこには砂場がなく、多くの子どもたちや保護者が砂場の設置を望んでいました。



乙和公園で遊ぶ子どもたち、普段から公園利用者が多い。右側の白い建物は復興公営住宅。



大好きな砂遊びも、まずは自分たちで砂をかき集めてから・・・。

■「乙和公園」にできた砂場 … みんなに「可愛がられて」います。



幼児から小学生の子どもたち、親子の皆さんが、待望の砂場で遊んでいます。遊んだ後は当たり前のように道具を片付け、砂場のカバーを掛けて帰ります。みんなの砂場、「だれかれの責任」ではなく自分が大事にしたいから、砂場を大切に可愛がっています。これこそ、全国に発信したい「砂場メンテナンスの飯坂モデル」です！

■ 砂場設置を記念して開催された「いいざかプラージュ 2016」

「プラージュ」とは、フランス語で「砂浜」を意味します。毎年夏、パリのアナトール河畔には人工ビーチが作られ大勢の観光客、地元市民が、砂の上でくつろぎ、砂遊びを楽しみます。私たち NPO は、その「プラージュ」イベントを福島県内各地で開催し、ここ乙和公園でもオープンしました。



イベントで使用した砂は新しく作られた砂場や近隣の保育所幼稚園等へ無償で提供されました。

■ 砂場イベントにおけるホスピタリティ空間とは

砂場では、子どもたちが長時間集中して遊びます。NPO 法人福島 SAND-STORY の砂場イベントでは、必ず子どもたちを見守るスペースを設置します。保護者がゆったりと子どもたちを見守り、ときには保護者同士、あるいは遊び疲れた子どもが保護者と一緒にくつろいだりできる空間です。

そこはまた、子どもの生活や健康、子育てに関する様々なお話をする場ともなります。子育てや食育等の専門的な知識と経験を有する NPO メンバーが、保護者との自然な会話を弾ませます。



■ 砂場イベントへの学生ボランティア

将来、保育者や教師として、あるいは親として子どもと関わる可能性のある若い学生の皆さんが、砂のイベントで間近に子どもたちと関わることや、実際の遊び指導のスキルを持つことはとても大切です。

毎回、福島学院大学、桜の聖母短期大学、福島大学の学生さんがボランティアとして活躍していただき、会場はとても楽しく、安心できる雰囲気になります。



NPO 法人 福島 SAND-STORY 主催

いいざか ブラージュ 2016

ボランティア募集します

来る 10 月 8 日（土）～ 9 日（日）、NPO 法人福島 SAND-STORY 主催による、「砂の遊びとアート」イベント「いいざかブラージュ 2016」を、飯坂町の「乙和公園」で開催します。

「ブラージュ」とは、フランス語で「砂浜」を意味し、パリのセーヌ河畔などに人エビチを設けることで、子どもから大人まで、ゆったりとくつろいだり、砂遊びをしたりする空間となっています。NPO 法人福島 SAND-STORY は、東日本大震災以降、子どもたちの砂遊び環境の取り戻しとして「ブラージュづくり」に取り組んできました。

「乙和公園」でも、大形の砂場とホワイトサンド砂場を設けて、親子での砂遊びやサンドアート制作を楽しんでいただけます。この機会に、是非あなたもボランティアとして参加し、砂遊びを楽しむ親子をサポートしてみませんか。

子どもはもちろん、すべての世代を惹きつけるサンドアート制作の特殊技術も獲得できますよ。

■いいざかブラージュ 2016 ボランティアの概要

◎日 時：2016 年 10 月 8 日（土）～ 9 日（日）
午前 9 時 30 分 ～ 午後 4 時 30 分
（1 日だけの参加でも歓迎です）

◎場 所：飯坂町「乙和公園」飯坂支所・学習センター裏

◎主な活動内容

- ・参加親子への砂遊び・サンドアートのサポート
- ・会場の安全管理や運営に関わる作業

ボランティアは、福島市内の大学生とのコラボレーションです。他校の学生との交流や、子どもの遊び・親子関係を間近に学ぶ絶好の機会です！！ お弁当も出ます。



問い合わせ・申し込み先
電 話：024-557-7179（事務局、河内）
Mail：info@fukushima-sand-story.com



■「乳幼児期の砂遊び」・砂遊びの展開と遊びが引き出す発達の要素

ランチタイムで紹介する DVD は、本 NPO 代表理事である笠間が 7 年間、京都市内の保育所を訪ねて、最初乳児だった女兒が満了して卒園するまでの砂遊びの様子を記録したものです。成長に沿って砂遊びはどのように変化し、子どもの能力を引き出したのか、保育者の課題は何かを示す貴重な映像で、全国の幼稚園や保育園の研修で使われています。本日は、ダイジェストでご覧いただきます。

新刊

乳幼児期の砂遊び

2011年10月制作

全2巻 DVD・VHS 共 各巻 ¥26,250 (税込)
各巻 40分

全巻 ¥52,500 (税込)



砂遊びは子どもの発達に大きな役割を果たしています。

保育園では 8～9 か月ほどの乳児たちが、人生における初めての砂との出会いを体験し、劇的な遊びの変化を見せていきます。

1 歳児期の特徴は「砂で遊ばない砂遊び」。手にスコップやプリンカップなどをもち、「もの」の操作を楽しむ砂遊びに没頭します。やがて、腕の力がつき、手指の動きがなめらかになると、砂山をつくってトンネルを掘ったり、ていねいに泥だんごを丸めたり。言葉の増加とともに、砂でつくったケーキのやりとりをするなど、いろいろな「ごっこ遊び」が広がっていきます。

一方、4、5 歳児期には、遊びのイメージはどんどん広がるものの、ありきたりの砂遊びにやや停滞を見せる時期があります。そのため、砂遊びは幼児期前半の遊びだと言われることもありますが、決してそんなことはありません。適切な保育者の関わりがあれば、子どもたちみんなが力を合わせて役割分担をしながら、砂場全体に大きなイメージを創り出す大胆な砂遊びが現れます。

この作品では、乳幼児期の砂遊びについて、いくつかの発達の視点を提起しながら、子どもにとっての砂遊びの意味と保育における援助のあり方について見ていきます。

第 2 巻は、同様の視点による、一人の女兒の 11 か月から 6 歳に至るまでの長期にわたる砂遊びの観察記録です。幼稚園・保育園におけるごく普通に見られる遊びの中に、子どもの発達と保育のポイントを探り出す貴重な作品です。

179 第1巻 砂遊びから見る子どもの発達

- 砂場の歴史 ● 砂との出会い ● 砂で遊ばない砂遊び ● 砂で遊ぶ砂遊び
- イメージと言葉を広げる砂遊び ● 多様な素材が広げる砂遊び
- 遊び空間としての砂場 ● イメージを共有する協同的砂遊び

180 第2巻 あいかの砂遊び - 5年11か月の記録 -

- あいか 11 か月、初めての砂遊び
- 1 歳児期の砂遊び（「もの」で遊ぶ砂遊び）
- 2 歳児期の砂遊び（砂の変化を楽しむ砂遊び）
- 3 歳児期の砂遊び（仲間との関わりと「ごっこ」を楽しむ砂遊び）
- 4・5 歳児期の砂遊び（イメージの広がり遊びの模索期）
- 遊びからアートへ ● 保育園最後の砂遊び（「エルマーのぼうけん」の世界へ）

監修・指導：同志社女子大学現代社会学部 教授 笠間 浩幸

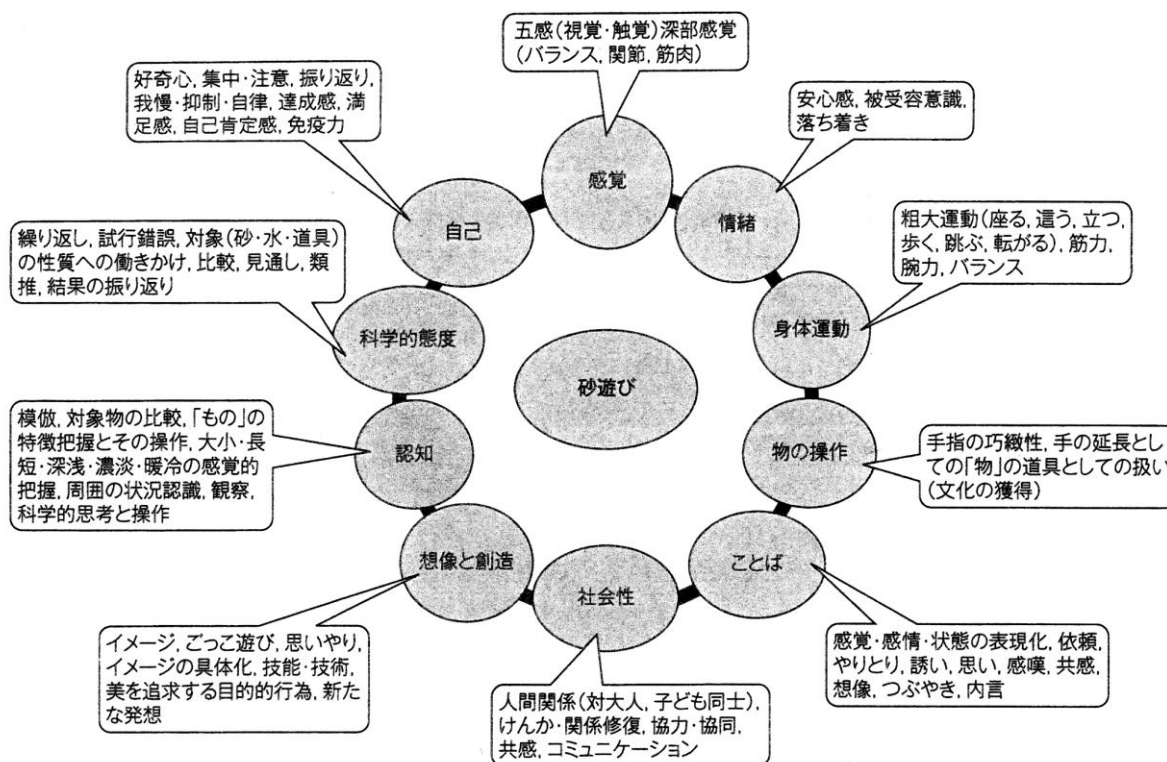
取材協力：社会福祉法人 花立かがやき会 中立保育園（京都市）

Video Tone
ビデオトーン

▼表 1：砂遊びの段階的局面

	フェイズ 1	フェイズ 2	フェイズ 3
特徴	感覚的な出会いとしての砂遊び	砂で遊ばない砂遊び (砂に間接的に関わる砂遊び)	砂で遊ぶ砂遊び (砂に直接関わる砂遊び)
子どもの行為	見る、触れる、座る、歩く、登る・・・	物を持つ、すくう、入れる、砂型をつくる・・・	掘る、かき寄せる、山をつくる、水と混ぜる、泥だんをつくる・・・
発達の視点	・感覚(とくに視覚・触覚) ・深部感覚(筋肉、関節、バランス)	・手指の巧緻性 ・手首、腕の回転、姿勢の維持 ・物の道具としての扱い(文化の獲得)	・微妙な操作性の向上 ・手指の力、腕力増大、触覚の鋭敏化 ・認知、科学的な態度と思考

	フェイズ 4	フェイズ 5
特徴	イメージと言葉が広げる砂遊び	アートとしての砂遊び
子どもの行為	砂を何かに見立てる、見立てをとおして友だちとやりとりをする ごっこ遊び、役割分担 砂場全体にイメージを広げていく・・・	砂を固める、彫る・刻む、模様や形をつくる 友だちとイメージを共有して制作する 制作物を評価し、活動を振り返る
発達の視点	・想像力、創造性 ・言葉 ・協同、社会性、コミュニケーション	・目的の意識化 ・表現 ・美意識 ・共感



▼ 図 1：砂遊びが引き出す子どもの発達の要素

東日本大震災以降の福島における 子どもの成長と発達の現状と課題

菊池信太郎 郡山市菊池医院 院長 医学博士 福島県小児科医会理事

菊池信太郎先生（NPO 法人郡山ペップ子育てネットワーク理事長）

2011年3月11日の東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の事故が、幼い子どもに与える影響の大きさとケアの必要性・重要性をいち早く訴え、震災の10日後に、郡山医師会を主体として市などと連携した「郡山市震災後子どもの心のケアプロジェクト」を立案。同年12月、原発事故後の影響から、外で思い切り遊ぶことができなかった子どもたちのために屋内遊び場「ペップキッズこおりやま」をオープンさせました。現在、福島県内外において、日本の子どもたちが直面している問題の指摘と理想的な成育環境モデルを示す活動に精力的に取り組んでいます。

「2013/2/23 日本経済新聞 夕刊」は次のように伝えていました。

震災から6年目を迎える今、福島の子どもたちはどうなっているのでしょうか。そして私たちの課題は？

増える子供の肥満 安心な遊び場 確保急ぐ 屋内施設、体験学習に力

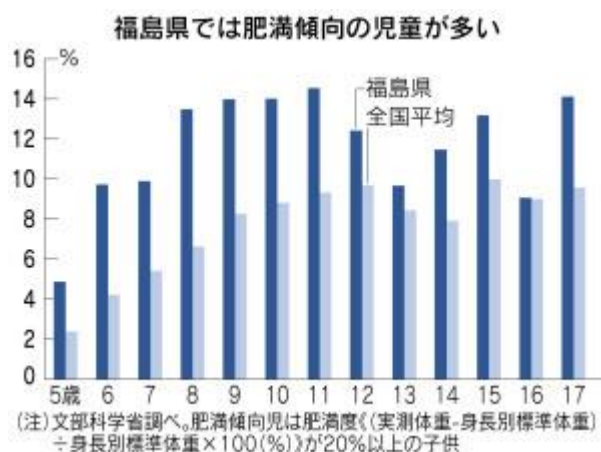
福島県に住む子供の肥満が明らかになったのは、文部科学省が2012年12月に公表した学校保健統計調査速報。都道府県別に12年4～6月時点で肥満児がどれだけ占めるかを調べたところ、福島は5～17歳のすべての年齢で全国平均を上回ったほか、7つの年齢で1位となった。特に小学校低学年で肥満が目立ち、全国平均の約2倍に達した。

運動量減少響く

福島県健康教育課は「放射能を恐れて屋外活動などの制限による運動量の減少や、東日本大震災後の環境変化による生活習慣の乱れなどが原因だ」と分析する。降雪が多い北海道や東北地方の子供は、震災前から肥満の傾向が続いていたが、7つもの年齢で肥満度がトップになったのは初めて。同じ震災の被災地である宮城県や岩手県に比べても目立って増えている。

11年3月の福島第1原発事故で大量の放射性物質が周辺に放出されて以来、県内では子供らの屋外活動を制限する動きが相次いでいる。小中学校の体育の授業では校庭の活動を取りやめて体育館だけに制限したり、幼稚園では屋外にある砂場の遊びを中止したりした。

避難を強いられた18歳未満の子供は原発周辺地域を中心に、昨年10月時点でもまだ約3万人もいる。



慣れない避難所生活が続いたほか、仮設住宅に移ってからも友達を失って体を動かす機会が奪われたと専門家は分析する。

運動しないまま成長すると健康にも問題が起きかねない。菊池医院（福島県郡山市）の小児科医、菊池信太郎副院長は「基礎体力や運動能力の土台がないまま、運動の最適年齢を迎えてしまう」と指摘する。運動の最適年齢は9～15歳で、ゴールデンエイジとも呼ばれる。子供の体が大人へ成長する時期で最も体力がつく年齢だ。菊池副院長は「運動せず肥満になれば、生活習慣病になる可能性も高くなる」と危惧する。

福島県は様々な子育て支援策を打ち出している

内 容	主な対象年齢
医療費無料化	18歳以下
屋内遊び場確保	小学生以下
自然体験活動の支援	中学生以下
体力向上のための指導者育成	小中学生
放射能に負けない手厚い保育	乳幼児（6歳以下）
放射能に関する基礎教育の充実	小学生
震災を踏まえた子育て環境の調査研究	乳幼児・小中高生



こうした懸念を減らすため、福島県内では子供が運動できる機会を増やす取り組みが進んでいる。その一つが屋内遊び場の建設だ。

福島県では屋内遊び場が増えている（同県郡山市のペップキッズこおりやま）

郡山駅から歩いて約10分の「ペップキッズこおりやま」。約2千平方メートルの敷地内にボールプールやランニングコース、水遊びのできる砂

場などが並ぶ。屋内遊び場としては東北地方で最大の規模だ。

生後6カ月から12歳が対象で無料で利用できる。昨年12月に開所し、週末には1000人を超える子供が訪れる。時間待ちになる日もある。3人の子供を連れてきた30代の母親は「近くの公園では除染が進んでいないので不安が多い。まだ肥満にはなっていないが、運動不足が心配だ」と話す。

放射線量の低下に伴い、学校での屋外活動の制限は解除されつつあるが、子育てに不安を抱える親は多い。屋内遊び場のニーズはかなり高い。県内ではこうした屋内の遊び場が自治体から補助を受けた施設だけでも38カ所ある。今後も増える見込みだ。

放射線量が比較的低い場所へ移動して運動する機会を増やす取り組みも進む。福島県は、県内の小中学生らを対象に会津地域などでの体験学習に力を入れる。事故から間もない11年7月から始め、延べ30万人以上の子供が参加した。

県はさらに専門家から子育ての総合的な助言をもらうため、研究者らで組織する「こども環境学会」と包括的に連携する協定を今月結んだ。保育園や学童クラブなどで最適な遊び方などを提言してもらう予定だ。

心のサポート重要

同学会評議員の笠間浩幸同志社女子大学教授は「福島県は放射能によるストレスがあり、子育ての総合的な支援が欠かせない」と指摘する。子育てには遊びの空間と時間、生活の仕方、共同体（コミュニティー）などが欠かせない。笠間教授は「大人から見守られながら育ったという実感が子供の成長にとって大切だ」と話す。

福島県は屋内遊び場などの施設整備だけでなく、精神的なサポートにも力を入れている。原発事故という逆境をバネに、子育て支援を他県より充実して「日本一安心して子育てしやすい県づくり」を実現しようとしている。

【日本経済新聞夕刊 2013年2月22日付】

第3部プログラム関連アライメント

■「保幼小中接続」の課題を砂場から

◎「保幼小中接続」とは：保育所・幼稚園・小学校・中学校の連携を図り、子どもたちの成長や発達課題に適切に対応することを目指すもので、次のように求められています。

- 保育所保育指針：修学に向けて、保育所の子どもと小学校の児童との交流、職員同士の交流、情報共有や相互理解など小学校との積極的な連携を図るよう配慮すること。
- 幼稚園教育要領：幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図ることにすること。
- 小学校学習指導要領：小学校間、幼稚園や保育所、中学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習や高齢者などとの交流の機会を設けること。

私たち NPO はこの課題を、「子どもの育ちの根っこ丁寧な受け渡し」ととらえ、それを「砂の遊びとアート活動」をベースに、具体的、実践的に進めていくことに取り組んでいます。特に保幼小の接続に関しては、子どもが小学校の環境（人的・物的）に慣れていくため、また、教師が子ども本来の姿を見取るために有効な手段となることも期待しています。

◎本 NPO 法人が取り組んでいる活動

保幼小のスムーズな接続のために、保幼時代に培った豊かな砂遊びを小学校の生活科に取り入れることや、砂を介した幼児と小学生の交流（遊びの共同）、保育者と小学校教師の交流などについて、モデル校での実践の準備を進めています。また、砂遊びやアート活動を学年にかかわらず行えるような環境づくりや先生方への研修などの準備も進めています。

「砂遊び」を素材とする保幼小中接続の研修プログラム

砂遊びは、子どもたちが大好きな遊びです。また、子どもの年齢や性別、人数を問うことなく、多様な遊びの展開と多面的な子どもの発達を引き出す要素に満ちており、幼保から小中までの子どもの成長に沿った保育・教育プログラムとして大きな可能性をもっています。そこで、保幼小中の子どもたちの発達の連続性を踏まえながら教育の円滑な接続を図るために、次のような「砂遊び」をモチーフとする保育者・教員を対象とする研修プログラムを提案します。

■研修全体の目的

- ◎砂遊びの具体的な展開事例（DVD「乳幼児期の砂遊び」）から、具体的な子どもの成長・発達の姿と環境構成の重要性をとらえる。
- ◎砂遊びから見る保幼小中の子どもの成長・発達の連続的把握とカリキュラムの系統的な構築について考える。
- ◎砂場でのサンドアートワークショップを通して、指導者自身による砂遊びの体験的学びを経験してもらうとともに、指導や環境設定のポイントについての理解を深める。

■主な研修内容

【子ども・遊びの発達の視点】

- 乳幼児期の子どもの成長に即した砂遊びの変化・発展
- 砂遊びがもつ子どもの発達を引き出す様々な要素と可能性
- 砂場の環境づくりと遊びへの関与の方法
- 保護者に対する遊びの重要性についての伝達課題

【教育・カリキュラムの系統的視点】

- 保育内容 5 領域と砂遊び（グループワークによる遊びの分析的討論を含む）
- 各教科（生活科・図画工作科・美術科・家庭科・総合的な学習）と砂遊び
- 保幼小中を貫く系統的かつ連続性のある指導計画作成の事例と課題
- 砂遊びを素材とする保幼小中間の触れ合い交流活動の事例と課題

【サンドアート・スキルの修得】

- 砂場でのサンドアート体験（自らが砂遊びの可能性を知る）
- 子どもが興味をもつ遊びの展開や道具類の使用法
- 遊びにおける適切な指導と援助の方法
- 砂場環境整備の具体的課題

現在、左のようなプログラムを、福島市学校教育課、福島市立小学校に提案しています。



「砂の遊びとアート」による保幼小接続事業について、2016 年夏、札幌市の幼稚園より招待を受け、研修会を行いました。保幼小の先生方が集い、砂遊びのWS と DVD 視聴、ディスカッションを行いました。

■ いわき市の鳴き砂と「いわき鳴き砂を守る会」

「鳴き砂」は環境のバロメーターであり、美しい浜の象徴です。

日本全国には、約 30 数カ所の鳴き砂海岸がありますが、いわき市は 11 カ所の砂浜で「鳴き砂」の存在が確認されている、まさに「鳴き砂の王国」です。

「いわき鳴き砂を守る会」は、20 数年前に結成され、いわきの鳴き砂を守る活動（生活排水、ゴミの不法投棄、海岸の開発が及ぼす鳴き砂への影響や鳴き砂の実態調査）を地道に行い、東日本大震災以降は、鳴き砂海岸の変化や放射能汚染についても丁寧な定点観測による実証検査を行ってきました。



◎「鳴き砂」はなぜ鳴くの？

花崗岩が 400 万年以上の時間をかけて風化し、川を下って海に出るまでに柔らかな長石や雲母が土に還り、次第に石英だけが残って波にもまれ、丸みをもった粒となって海岸に打ち上げられて白い砂浜を作ります。そこに外からの圧力が加わると砂同士が震動し合い澄んだ美しい音を発生させます。「鳴き砂」は、外国では singing sand, musical sand, whistling sand などと呼ばれますが、いずれも素敵な名称ですね。(参考：『鳴き砂』いわき鳴き砂を守る会、2011 年)



■ いわきプラージュ 2016

2016 年 7 月、いわき市 JR いわき駅前でも、プラージュを開催しました。



■ 福島からの全国への発信が拓く新たな可能性

上記、札幌市以外でも昨年 11 月、東京都杉並区が主催するビッグイベント「すぎなみフェスタ」にてプラージュを開催しました。これは杉並区に設置されるオリンピック用のビーチバレーコートの有効活用を図るもので、今後もオリンピック・レガシー（遺産づくり）として、子どもたちの遊びや地域コミュニティのイベントとして継続的に関わっていきます。



「福島 砂場シンポジウム IN いいざか」は宣言します！

「砂場」は、もっとも身近にある自然素材に満ちた遊び場であり、砂遊びは多くの子どもたちが大好きな遊びです。砂場は子ども本来の活動的な姿を受け止め、子どもの様々な発達を引き出す、あらゆる可能性に満ちており、歴史的にも社会的にも裏打ちされたかけがえのない遊び環境です。

福島県はそんな砂場を一度失いかけてましたが、これまで力を合わせてその取り戻しを図るとともに、単なる取り戻し以上の新たな環境づくりに取り組んできました。

東日本大震災から 6 年目を迎えようとしている今日、私たちはこれまでの経験を話し合い、砂場環境の可能性と重要性を改めて確認しました。福島県、そして日本全国の子どもたちに、安心安全な砂場環境を保障するために、次のことを宣言します。



（本日最後に皆さんと宣言文の確認をします。宜しくお願いします）



2017 年 2 月 26 日「福島砂場シンポジウム IN いいざか」参加者一同

NPO 法人 福島 SAND-STORY

〒960-8164 福島市八木田字神明 94 番地

アドプロダクション内 Tel. 024-545-7779 Fax. 024-545-7888

URL:<http://fukushima-sand-story.com> e-MAIL:info@fukushima-sand-story.com